（別紙２）

審査の結果の要旨

論文題目　『近世地域の穀物流通と商人の研究』　　氏名　多和田雅保

本論文は、近世の北信地方（長野県北部）を対象として、穀物の流通とこれを担った商人及びその仲間、さらには流通の場としての都市と農村における社会構造を分析するなかで、近世の地域社会の構造的特質を考察しようとするものである。

はじめに序章において、本論文の問題関心と分析視角についてていねいにふれたあと、本論部分は８つの章と１つの補論が３部に分けて構成され、最後に終章で総括が行われる。

第１部「１７世紀の市と地域」は２つの章と補論からなる。１章では、在方市の例として谷街道に沿う小布施（現、小布施町）をとりあげ、元禄期の二つの争論を検討しながら、市場の構造、市見世の様相、さらには「内売買」（市場外における店舗内取引）を行う宿と市の相剋状況などを解明する。２章は、北信最大の都市であった善光寺町における市の基本構造とその変容過程を寛永から元禄期にかけて詳細に追究する。

第２部「１９世紀の穀物商人と領主権力」は３つの章からなり、近世後期における飯山藩・松代藩領における穀物取引とその担い手について詳細に検討する。まず３章では、飯山藩における年貢籾手形仕法という特徴的なシステムを復原的に考察し、豪農商による手形の物権化と米穀取引の動向を明らかにする。４章は、松代藩領における穀物の流通構造を、穀物商人仲間の動向と藩権力の政策との関連のなかで検討する。また５章では、松代藩領における弘化２年の凶作関係史料を紹介し、穀物商人の活動と藩の対応を見る。

第３部「１９世紀の穀物流通と地域」は、主題を地域社会論に移し、３つの章から構成する。６章では、筆者が新たに発見した小布施村小山家文書の分析を通して、当該地域の穀物商人の個別経営と、穀物売買を介しての地域との関係構造、さらには小山家も所属する穀屋仲間の性格などを多面的に解明する。７章は、善光寺西町の家作と住民構成を空間と社会の両面から復原し、西町に展開する市との関わりにも言及する。８章では善光寺町における米穀流通の実態分析を中心に、同町の市場と問屋をめぐる社会構造の変容を追う。

最後に終章では、本論文全体の論点を市と地域の問題を中心にまとめ、北信における商品・貨幣流通や地域社会論をめぐる新たな論点を提示する。

本論文は、新たな史料の発掘を基礎とする精緻な分析と、こうして得られた実証の成果から帰納的に抽出された骨太の論理構成を備える高いレベルの達成といえる。１７世紀と１９世紀を中心に、北信の広大かつ複雑な所領構成と社会構造を持つ対象に真正面から取り組み、穀物という近世社会におけるもっとも基本的な商品・貢租の流通構造の解明を切り口として、地域社会の具体像を鮮明に描き出した点は特筆される。その中で、特に穀物商人とその仲間の性格、また市場と問屋との相剋状況、年貢籾手形の発見と特質の解明などは極めて注目すべき重要な成果である。

本論文では、史料の制約もあって１８世紀における動向への言及が見られず、また部・章の構成にやや難点があるが、上記のような顕著な成果に鑑みて、本審査委員会は本論文が博士（文学）に十分値するとの結論を得た。